別紙様式

令和５年３月８日

教育長　様

校番　33　　府中　　高等学校長
（　　全日制　　課程）

「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和４年度　実施報告書

１　学校の教育目標等

⑴ 教育目標

府中高校は，自己を客観的に理解し，社会における使命を見いだし，進路実現に向けて，主体的・自律的にねばり強く取り組み続ける生徒を育成します。

⑵ 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

ア　育てたい生徒像

（ア）物事を多様な見方・考え方から深く学び，将来の目標を実現できる生徒

（イ）主体的・自律的にねばり強く取り組み，困難な状況においても，果敢に挑戦し続ける生徒

（ウ）他者を思いやり，他者と協働しながら，社会に貢献できる生徒

イ　育成を目指す資質・能力

（ア）読解力

（イ）論理的思考力

（ウ）表現力

⑶ 学科等の特色

入学時から具体的な目標を設定し，仲間と切磋琢磨しながら，学習だけでなく，学校行事や部活動，清掃等の学校生活のあらゆる場面において，主体的・自律的に取り組むことを通して，自らの強みを理解し，弱みを克服して，将来の夢を実現する生徒を育てる学校。

２　研究の概要

⑴ 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

生徒が各教科・科目等で身に付けた資質・能力を実際の課題解決に活用するために，「総合的な探究の時間」を核にして，「考えるための技法」を身に付けるとともに，教科・科目等の知識・技能を有機的に結び付け，外部指導者や地域人材の助言や評価を踏まえ，学年で段階的に，読解力，論理的思考力及び表現力の向上を図る。

⑵ ２年後の目指す学校の姿

難関国公立大学20名を含む国公立大学100名の合格者数の実現とともに，生徒が主体的・自律的な学習を進め，読解力，論理的思考力，表現力を身に付けることができるようサポートする学校。

⑶ 令和４年度の目標

ア　アウトプット（活動指標）

２学年の「総合的な探究の時間」において，自らが設定した探究テーマに対して，仮説を立て，教科等における探究手法を取り入れて，ＰＤＣＡサイクルで論理的思考力を高める。外部人材（大学院生や同窓生等）から評価を受け，生徒が自己・他者評価を記録し，探究テーマ・方法について改善を進められる。

イ　アウトカム（成果目標）

（ア）民間テスト（GPS-Academic）における思考力（批判的思考力，創造的思考力，協働的思考力）レベルＳ・Ａの割合が30%以上になっている。

（イ）模擬試験（２学年 11 月）の３教科（国・数・英）平均偏差値 50 以上の割合が 57%になっている。

(4) 令和４年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間」

イ　カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）カリキュラム開発を受けて，来年度の年間シラバスの一部見直しを行った。具体的には，今年度までのシラバスでは，１(2)イに示す育成を目指す資質・能力のうち読解力と表現力の定義のみを記載するものであったが，今年度の見直しにより論理的思考力の定義も記載できるよう仕様を変更した。シラバス作成の過程において，各教科内で育成を目指す資質・能力について議論する機会を与えることで，その共通理解を促すことをねらいとしている。また，生徒と育成を目指す資質・能力を共有するために，マスタールーブリックを生徒が理解しやすいように改善する方向で検討を進めている。

（ミクロレベル）学校の教育目標や育成を目指す資質・能力の育成に向けて，「総合的な探究の時間」を核としたカリキュラム開発を行った。具体的には，探究活動における「問い」立てや「論証」，レポートや論文という形として「論著」し，論証したことを「発表」するといった活動の中で，本校が育てたい資質・能力である「読解力」を１学年，「論理的思考力」を２学年，「表現力」を３学年に育成するカリキュラムである。

今年度は，２学年を対象に「論理的思考力×論証」をテーマとし，問いの「論証」を軸として「論理的思考力」を育成するカリキュラムを開発した。論理的思考力の育成については，表１に示す「論理的思考力トレーニング」を実施した。内容としては，表１①～④の授業では，演繹法など基礎的な思考方法について確認する内容から始まり，様々な形式・難易度の思考力問題を通して，他者と協働しながら論理的思考力を鍛える活動を行った。また，表１⑤～⑦では，「論証」に必要な批判的思考力の育成に重点を置いた授業を実施した。批判的思考力については，昨年度の１学年を対象に実施した民間テスト（GPS-Academic）の結果において，高いレベルにある生徒（Ｓ・Ａ）の割合が 20%を下回っており，今年度のカリキュラム開発を進めるにあたって育成すべき能力の重点目標に位置付けている。

表１「論理的思考力×論証」の授業

①　論理的思考力とは何か
②　論理的に考えて結論を出す
③　表を用いて情報を整理する
④　様々な視点で解決策を考える
⑤　先輩レポートの査読
⑥　批判的思考力とは何か
⑦　批判的思考力を鍛える

こうした活動を通して，11 月に実施した活動報告会では，他者の探究活動について，根拠や論理性など批判的に吟味する視点を持たせ，生徒同士が改善点などを指摘し合う活動を行った。

核とするカリキュラムを充実させるに当たって，１学年の国語（「言語文化」）において和歌の読解や評価の観点を学ぶ取組を実施した。和歌の読解については，「総合的な探究の時間」において実施した，主観と客観の理解を深める読解力トレーニングの要素を取り入れ，和歌のあらすじと疑問点を整理させる活動を取り入れた。また，評価の観点については，評価の根拠を明確に示すことに重点を置いて指導しており，２学年に実施する「総合的な探究の時間」における探究活動の自己評価・他者評価に繋がる内容となっている。

ウ　校内体制

２(4)イの取組について，実行委員会と「総合的な探究の時間」担当者が連携し，カリキュラム開発を行った。また，「総合的な探究の時間」の趣旨や内容等について教職員全体で共通認識を図ることや，「総合的な探究の時間」において育てたい資質・能力と各教科の連関を生徒に意識させることをねらいとして，教科主任会議において論理的思考力トレーニング問題の作成を依頼し，１月に２学年の生徒を対象にトレーニングを実施した。

(5) 学習評価

今年度のカリキュラム開発の柱である「論理的思考力トレーニング」については，ポートフォリオの記述を参考に評価を行った。生徒の記述の中には，「論理を飛躍させないよう注意する」「主観的になりやすいことを，いかに客観的根拠を用いて述べるかが大切」など，トレーニングの効果として捉えることができるコメントがみられた。さらに，各教科が作成した論理的思考力トレーニングを実施した際には，「科目や問題ごとに考え方や付けたい力が異なることが分かった」「問題の意図を正しく読み取る必要性を感じた」などのコメントがみられた。

また，活動報告会における他者評価のコメントを分析したところ，第１回活動報告会（７月）では，「〇〇が良かった」「〇〇が分かりやすい」など，他者の探究活動を肯定的に評価するものが多くみられたが，第３回活動報告会（11 月）では，「〇〇だけでは検証の根拠として納得し難い」「〇〇から△△を導くには論理の飛躍がみられる」など，根拠や論理性などの視点で疑問点や改善点を指摘できるような記述がみられるようになった。

これらから，カリキュラムを通して物事を論理的に捉える視点をもたせるだけでなく，論理的に思考することの重要性や，各教科との連関についても意識させることができたと考えられる。

(6) カリキュラム評価

カリキュラム評価の指標として位置付けている民間テスト（GPS-Academic）では，思考力（批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力）が高いレベルである生徒（Ｓ・Ａ）の割合を 30%以上にすることを目標としていたが，今年度の結果は26.2%であった。目標とする数値には届かなかったが，昨年度（昨年度Ｓ・Ａ割合 20.9%）と比較し 5.3 ポイント増加したため，論理的思考力を育成するカリキュラム開発に一定の効果があったと考えられる。

３　令和４年度の成果及び課題

(1) 成果

・民間テスト（GPS-Academic）の結果のうち，「高いレベルにある生徒」をＳ・Ａに定め，その割合を表２に示した。思考力全体のＳ・Ａの割合は，26.2%と目標とする数値（30%）を達成することはできなかったが，全ての項目においてＳ・Ａの割合が昨年度よりも増加していることが分かった。特に，協働的思考力については41.8%と，昨年度よりも8.1ポイント高い結果となった。また，重点目標としていた批判的思考力については，表３に示す「論理的に組み立てて表現する（記述式）」力のＡ評価の割合が，昨年度と比べ0.9ポイントの増加にとどまったものの，Ｂ評価の割合を8.1ポイント増加させることができた。さらに，昨年度30%を超えていたＣ評価の割合を9.1ポイント減らすことができた。

表２ GPS-Academic 思考力Ｓ・Ａの割合の経年比較

	昨年度（１年次）	増減	今年度（２年次）	差
批判的思考力	16.9%	↗	21.2%	+4.3
協働的思考力	33.7%	↗	41.8%	+8.1
創造的思考力	12.4%	↗	15.9%	+3.5
全体	20.9%	↗	26.2%	+5.3

表３ GPS-Academic 批判的思考力（記述式）の経年比較

論理的に組み立てて表現する（記述式）		昨年度（１年次）	増減	今年度（２年次）	差
A	説得力のある主張やその根拠を提示できる	7.9%	↗	8.8%	+0.9
B	適切な主張や根拠を提示できる	60.1%	↗	68.2%	+8.1
C	何らかの主張や根拠を提示できる	31.5%	↘	22.4%	−9.1
−	無回答または評価外	0.6%	→	0.6%	±0

協働的思考力が向上した要因として，「総合的な探究の時間」に限らず，各授業で実施しているペア・グループワーク，さらに生徒主体で運営する学校行事や部活動などにより，他者を理解・尊重しながら問題を解決しようとする力を育んできたことがあげられる。一方，今年度の重点目標として位置付けていた批判的思考力については，短期間で向上させることが困難であると捉えている。そのため，各教科と連携しながら来年度も継続して育成に努めたい。

・模擬試験（２学年 11 月）の３教科（国・数・英）平均偏差値 50 以上の割合を１学年 11 月と２学年 11 月を比較すると，61.6%から 63.2%と 1.6%向上した。

(2) 課題

「論理的思考力×論証」のカリキュラムの評価については，　３(1)成果が示すように一定の効果がみられたが，民間テスト（GPS-Academic）で測った思考力のうち，批判的思考力と創造的思考力については，高い水準（Ｓ・Ａ）である生徒の割合が批判的思考力 21.1%，創造的思考力 15.9%と依然 30%以下にとどまっている。中でも，批判的思考力については「情報を抽出し吟味する力」，創造的思考力については「情報を関連づける・類推する力」のＳ・Ａの割合がともに全国平均（無学年）を下回っていて，情報の収集・判断力や活用能力の育成に課題が残る結果となった。一方，協働的思考力については昨年度と比べＳ・Ａの割合が 8.1 ポイント増加しただけでなく，全国平均と比べても高い水準であることが分かった。

こうした結果を教職員全体で共有し，本校生徒の資質・能力の現状について各教科の視点を踏まえ分析するとともに，マスタールーブリックとの連関について共通理解を促すことができるような校内体制を構築する必要があると考えられる。

４　令和５年度の研究目標及び取組内容

⑴　令和５年度の研究目標

ア　アウトプット（活動指標）

３学年の「総合的な探究の時間」を核として，探究が各教科・科目と有機的に結びついていることに気づかせ，幅広い学問の知識・技能の必要性を自覚させたうえで，自らの主張を他者に理解してもらう表現力を育成する。また，課題を発見し，次の探究に結びつける探究のスパイラルを完成させる。

イ　アウトカム（成果目標）

（ア）マスタールーブリックを用いて探究活動の成果物（論文やスライド資料等）を評価し，表現力の資質・能力がレベル３以上である生徒の割合が60%になっている。

（イ）模擬試験（３学年10月）の３教科（国・数・英）平均偏差値50以上の割合が36%になっている。

⑵　令和５年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラム開発の概要

令和５年度は，これまでに開発したカリキュラム（１学年「読解力×問い」，２学年「論理的思考力×論証」）について，読解力テストや民間テスト等で明らかとなった課題を改善しながら授業を展開する。また，３学年については，「表現力×論著・発表」をテーマとしたカリキュラムを新たに開発する。具体的には，マスタールーブリックを用いて，本校で育てたい表現力について確認するとともに，３学年のうちに習得を目指すレベルについて共通理解を持たせるとともに，探究活動のまとめとして作成する論文や発表資料に必要な表現力を養うトレーニングを実施する。その際，外部人材を活用し，論文作成に必要な文章表現力の磨き方や，効果的な発表資料の作成方法，そして伝える相手を意識したプレゼンテーションの仕方について学ぶ機会を設ける予定である。

イ　校内体制

「総合的な探究の時間」と各教科・科目の学習を有機的に結び付けるため，各教科主任及び「総合的な探究の時間」開発担当者との連携を活性化し，カリキュラム開発を全教職員が参画して行う体制を構築する。また，職員研修等を通して，年間シラバスに定義した資質・能力とマスタールーブリックとの整合性について協議したり，育てたい資質・能力に関するイメージマップを作成したりする機会を設け，本校が育成すべき資質・能力について教職員全体で共通理解を促すとともに，協議内容を踏まえてマスタールーブリックやシラバスを適宜見直す。

「総合的な探究の時間」のカリキュラムを組織的に開発できるような体制をこれまで以上に整えるとともに，「総合的な探究の時間」を通して学年の枠を超えた生徒の繋がりを持たせられるような機会を設ける。具体的には，２学年の生徒が１学期に行う探究課題の「問い」立ての際に，３学年の生徒がアドバイスをしたり，３学年の生徒が２学期に実施する探究活動最終報告会に１，２学年の生徒を参加させたりする活動を取り入れるなど，探究活動のノウハウを下級生に引き継ぐ体制を構築させる。